The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英語ReadingでのCALLシステムとCLEの活用
Author(s)	小薬, 哲哉
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2016, 17, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英語 Reading での CALL システムと CLE の活用

小薬　哲哉　（大阪大学　大学院言語文化研究科　言語文化専攻）

１．はじめに

教育現場において、ICT 活用の動きは既に広く浸透し、その技術革新の度に、授業での活用の仕方も日々変化して、多様化している。また、「能動的学習（アクティブ・ラーニング）への転換」が盛んに唱えられるようになり、教員から学生へ一方向的に教授するのではなく、学生間で主体的・積極的に意思疎通を図って、協同して学習を進めていく形態の授業が求められるようになった。

2016 年度、1・2 年次生対象の「英語 Reading」の授業で CALL 教室を使用させていただけることになった。本稿は、当該授業において、CALL システムを活用しつつ、アクティブ・ラーニングを促すための授業展開を目指した、筆者の試行錯誤を（恥ずかしげもなく）記した活動報告である。

２．英語 Reading の授業活動

中央教育審議会の「質的転換答申」は、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と指摘し、伝統的な知識詰め込み型中心の教育から、学生主体型の教育に換えていくことが重要だとしている。実際、筆者が授業初回に行うアンケートでも、英語を「使える」ようになりたいと望む学生が多くいる。文法やリーディング中心の授業で、教員の説明をじっと黙って聞いているような形態ではなく、積極的に他者と会話、議論することで、英語を実際の意志伝達手段として「使える」ようになりたいという意図があるようだ。

筆者自身は、文法やリーディング中心とした「従来型」授業に反対する立場ではなく、むしろその良さを取り入れつつ、学習者の目的に即した学習活動を統合してくべきだと考えている。そのためのツールとして、CALL システムが有用であると考える。

「英語 Reading」の拙授業では、①アカデミックな内容の英文を読むのに必要な語彙力を身につける、②英文の効果的な読み方を習得する、③ペアやグループでの議論やプレゼンテーションを通して、実践的に英語でコミュニケーションを行うための技能を身につける、という三つの学習目標を掲げた。この目的のため、授業では(i)教科書を使った Reading 学習と、(ii)ペア・グループによる音読、(iii)Discussion 活動、そして(iv)英語プレゼン試験を行っている。以下では順に、(i)～(iv)の活動に際して、どのように CALL システムを活用しているかを紹介する。

まず、(i)教科書を使った Reading 学習では、教科書付属の Reading Comprehension 問題の予習を必須とし、CLE にアップロードしたテストフォーマットに問題の答えを入力する課題を毎週課した。その獲得点数が、授業の成績評価の二割に相当するため、受講生は毎回ほぼ全員が実施する。近年はスマートフォンの普及によって、大多数の学生はどこにいてもインターネットに接続できるようになったが、未だスマートフォンや自宅用パソコンを持たない学生も少数ながら存在する。そうした学生も CALL 教室に早めに来て、事前に予習を提出している。

CLE による事前予習の必須化によって、授業開始時点で受講者は教科書の内容を理解しているため、内容解説を必要最小限に留め、学生同士の活動に時間を割くことができている。また、CLE の「成績管理」から答案の統計結果が利用でき、正答数の低い問題に絞って丁寧に説明できるため、役立っている。

(ii)ペア・グループによる音読では、教科書の指定パラグラフを、学生同士でペアやグループになって交互に音読する活動を行った。音読の学習効果の重要性は広く知られているが、予め予習し内容を理解した英文を声に出すことで、さらに理解を深めることを促す。音読活動は単調で一人では継続しにくいが、学習者同士で直に向い合って行うことで積極性

や向上心を高める目的もある。

活動に慣れてきて中だるみしがちな学期後半には、Movie Teleco を利用し、音読音声を録音、提出するという課題を出した。課題では、教科書の指定段落を、①所要時間、②発音とイントネーション、③強勢、④語と語のリンキングの観点から可能な限り英語母語話者に近づけて音読することが求められる。音読による英文の深い理解から、さらに英語の音声や発声の側面に意識を向け、自主学習によってその向上を図った。授業中も Movie Teleco で練習する時間を設けたため、他の学生が取り組む姿に感化され、課題音源と自分の音声を聴き比べつつ、何度も熱心に音読を繰り返す様子がうかがえた。

(iii)Discussion 活動では、英文に関連したトピックについて、ペア・グループになって英語で議論する活動を行った。授業開始当初の目的としては、この活動を主眼に置いて、受講者同士の活発な意見交換や関連英文記事などで発展的学習につなげる予定であった。しかし、今学期この活動には改善の余地が大いにあった。その理由として、学生間の議論を積極的に促すための教員側の準備や支援策が十分でなかったこと、考えを口頭で英語にするための学生のスピーキング力とその練習が足りなかったこと、そして、パソコンモニターにより学生同士の顔が見えにくく、意見交換や議論がしにくいという CALL 教室特有の性質によるものが考えられた。

最後に、(iv)英語プレゼン試験では、個人またはグループで、英語で口頭発表を行うというものである。CLE 上に、教員選定の発表用トピック候補のリスト、ルーブリック形式で示した発表の評価基準、そして、見本となる海外の学生による発表風景の動画をアップロードしておき、発表の作成手順や教員から期待されるポイントを明示化するよう努めた。

発表時、聴衆として学生の積極的参加を促すため、質問者に加点を行うことを予め告知した。さらに発表に傾聴してもらうよう、発表後に発表者のトピックをメモして CLE で答える小テストを行い、理解度を確認した。また紙面で発表者へのコメントを行ってもらい、それを発表者に返却するフィードバックを行ったが、これを CLE で行えるようにしたい。

以上、英語 Reading 授業においてアクティブ・ラーニングを促す授業展開を目指した、筆者なりの CALL 教室と CLE の利用法について述べた。もう一点付け加えておきたい点として、CLE による成績評価の一部公開がある。提出課題や試験など、学生の成績評価に重要な項目については、その一部を採点後に CLE 上で各個人に開示する試みを行っている。学期途中で自分の成績評価を知ることで、主体的に学習する意欲を喚起でき、期末試験でパフォーマンスの向上が見られるが、その具体的な影響や効果は、今後慎重に検討していく必要がある。

３．おわりに－ CALL 活用の利点と課題

最後に、CALL システムの活用事例を基に、筆者なりの CALL システム活用の利点と（筆者自身の）課題を分析してみたい。上記の通り、CALL システムは CLE と連携することで、予習等の課題の提出と配布、授業資料、評価基準、成績など情報の提示、音読やプレゼンテーション活動のプラットフォームなど、授業における学習活動の必要不可欠な基盤となっており、学生のアクティブ・ラーニングを促すために大きな効果があると思われる。

一方で、(iii)Discussion 活動で触れたように、モニター画面があることで、他の学習者の様子が見えにくく、対面で議論しにくいなど、学習者同士が直にインタラクションする際の難点が見えてきた。学生が望む「言語を『使う』」ための訓練には、直に対話しつつ行うことが不可欠であり、これは「アクティブ・ラーニング」型の授業が目標とすることでもある。しかし、このような課題は、座席の配置や移動の自由化などの工夫で改善できると思われる。また、CALL が得意とする授業形態と筆者が追い求める授業の性格に、いくらかのずれもあるのかもしれない。

筆者は今年度、CALL 教室を使い始めたばかりである。自身の経験不足・準備不足から試行錯誤の連続であり、まだまだ課題が山積みである。しかし、CALL システムの有用性や可能性は大いに実感できた。今後、CALL システムを十分に活用できるよう、さらなる研鑽を積んで、より効果的な利用ができるよう目指していきたいと思う。